

Title	J. A. コメニウス著『ATRIUM [広間]』の内容と意義： 第二言語教育における上級学年用教科書の姿
Sub Title	
Author	松岡, 弘(Matsuoka, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2013
Jtitle	日本語と日本語教育 No.41 (2013. 3) ,p.161- 182
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-00000041-0161

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

J. A. コメニウス著

『ATRIUM [広間]』の内容と意義

—第二言語教育における上級学年用教科書の姿—

松 岡 弘

1. はじめに

本稿は、ヤン・アモス・コメンスキー (Jan Amos Komenský (1592-1670)、ラテン語名コメニウス (Comenius)、以下これに従う) の著したラテン語教育のための教科書の一つ『ATRIUM [広間]』の概要と内容の一部を紹介し、現代に通じるその普遍的な意義を、第二言語としての日本語教育を実践してきた者の視点と経験に依拠しつつ考察するものである。最初の2~5章で ATRIUM (以下『広間』とよぶ) の概要とこれに関連する事柄をまとめ、6章で原文の一部、『広間』第20章を日本語訳で示す。最後に、日本語教育とのつながりを述べる。

2. Atrium『広間』とはなにか~三部作の一つとしての『広間』~

ラテン語教師・教育者としてのコメニウスが残した、ラテン語教育・学習の教科書・教材として、『Orbis sensualium pictus [世界図絵]』は現代に至るまで世界的に有名であり、そしてまた、『Janua linguarum reserata [開かれた言語の扉]』も、少なくとも18世紀のヨーロッパで広く用いられた。また、普及することはなかったが、演劇台本スタイルの『Schola ludus [遊戯学校]』も、研究者の間で論じられることが多い。

実は、コメニウスにはこれらの他に『Eruditionis scholasticae [学校教育の]』を冠した共通の総合タイトルをもつ、3部からなるラテン語教育のた

めの教科書が存在する。各部の名称は次のとおり。(ODO 目次記載)

Pars I, VESTIBULUM, Rerum & Linguae fundamenta ponens.

[第1部、事物と言語の基礎を固める「前庭」]

Pars II, JANUA, Rerum & LL. structuram exhibens.

[第2部、事物と言語の構造を提示する「扉」]

Pars III, ATRIUM, Rerum & LL. ornamenta exhibens.

[第3部、事物と言語を飾る「広間」]

これら3種の言語教科書はコメニウスがハンガリーのシャーロシュ・パタク滞在時代に完成し、*Eruditio scholastica* のタイトルで1652年に印刷・刊行された(大橋(2004)、36 p.)。挿絵はなく600頁の1巻本であった(Blekkastad(1969)、505 p.)。後に自らの著作をまとめ、1657年にアムステルダムにおいて刊行した2巻本の『OPERA DIDACTICA OMNIA 1, 2』(『教授学全集 1, 2』略称 ODO1, 2)の第三部にこの順序で収められた。なお、『前庭』と『扉』については、シャーロシュ・パタク以前に作成されたものがあり、ODO2にある『学校教育』の中の「前庭」と「広間」は、それぞれ旧作を大きく改訂したものである。本稿の考察と関連するのは改訂された後の『前庭』と『扉』であり、特に区別のある場合は、初版『前庭』、第二版『前庭』、初版『扉』、第二版『扉』と呼びわけることとする。

従って、ODOに収められた『学校教育』は、第二版『前庭』、第二版『扉』、ならびに『広間』の三部で構成される「事物と言語の教科書」であるが、いわゆる本文にあたる「テキスト」だけが書かれたのではなく、『前庭』にはインデクスと文法、『扉』にはレキシコンと文法、『広間』には文法が付随していて、いわば、本文(テキスト)・辞書(レキシコン)・文法の三位一体の原則で構成されたラテン語教育の教材・教科書である。但し、『広間』のための辞書だけはODOに入らず、独立の辞書として刊行された。なお、ODOはコメニウスの教授学関係の著作の集大成として刊行されたのであって(ODOに収められたコメニウスの全著作については、Čapková

(2007)の英文による解説があり、筆者にとっての導きの糸となった)、それ自体は教科書として考えられていない。従って『学校教育』の中の「テキスト・辞書・文法」はラテン語のみで記述され、独立して出版されている『扉』、『前庭』、そして『世界図絵』にあるような他言語による対訳は載っていないし、挿絵も添えられていない。

以上が『広間』の出版事情であるが、その教科書としての役割を述べるならば、具体的にはコメニウスのハンガリー滞在時代(1650-1654)の中等学校における3年間の教育課程の第三学年で用いるべく編纂されたラテン語言語教科書であり、より一般的に言えば、初級段階の第一学年「前庭」、中級段階の第二学年「扉」、そして上級段階の第三学年「広間」という構想の中での最終段階であったと見てよい。(コメニウスは最初7年間の汎知学校を構想していたとされるが、シャーロシュ・パタク時代に3年間に変更した(Čapková (2007) 25 p.)。なお、コメニウスが構想した7年間ないしは最初の3年間の授業内容は、藤田(1985, 29 p., 66 p.)と貴島(2005)で紹介されている。)

このように、学校の中でのラテン語という第二言語教育において、『前庭』から『扉』、そして『広間』へ進むのが授業の根幹であり、『広間』がその到達点・頂点に位置づけられることは、ドイツにおけるコメニウス研究の第一人者 Schlaller のコメニウスの教科書相関図によっても示されている(Schaller (2004, 27 p.))。

3. 教科書『扉・広間』の意義

生前のコメニウス自身がその重要性を強調する言語教科書『広間』であったが、これがコメニウスの死後にも教科書として印刷され、広く利用されることはなかった。これについては本章の後半で検討するが、『扉』が、初版であれ第二版であれ、それぞれ独立の言語教科書として、対訳・多言語訳を付して印刷・刊行され続けたこと、また、第二版『扉』の内容

が年少者用に書き改められ、挿絵と対訳・多言語訳を付して『世界図絵』として刊行され、ヨーロッパでベストセラーにまでなったことと比べると、きわめて対照的である。『前庭』についてもその第二版は、コメニウスの生前にオランダで挿絵入りオランダ語訳付きが刊行されている。だが『広間』に関しては、1657年出版のODOに収められて以来、単独の教科書として刊行されたものは、筆者の知る限り存在しない。

しかしながら、興味深いことに、「扉」と「広間」のテキストの全内容を左右の頁に対比して印刷したものが一点、存在する。これはコメニウスの生前に、Kvačala (1904) によれば、W. Frey によって1661年にチューリヒで刊行されたが、その現物に接する機会に恵まれなかったところ、チェコのコメニウス博物館の図書室でこれを見ることができた。その書名には、ODO中の「学校教育」の第2部・第3部に掲げられたものがそのまま用いられている。すなわち

ERUDITIONIS SCHOLASTICAE

JANUA, RERUM ET LINGUARUM STRUCTURAM: Itémque

ATRIUM, (parallele positum), RERUM ET LINGUARUM ORNAMENTA exhibens.

[ヤン・アモス・コメニウス著『学校教育：事物と言語の構造を提示する「扉」及び事物と言語を飾る「広間」(並列配置)』(1661)]

「扉」と「広間」の内容が左と右の頁に平行に配置されたこの教科書(教科書としてはその厚さ・分量に圧倒されるが、後半はインデックス)を見て筆者が直感的に思ったのは、筆者がこれまで言語教育の現場で直面してきた難問を解く鍵、あるいはそのためのヒントがここにあるということであった。筆者の「広間」への関心は、この「扉・広間」併記教科書との出会いを出発点とする。このことは後半にのべるとして、この「扉・広間」併記版を足がかりに、「広間」の内容を「扉」との対比・関連のなかで検討する。

『扉』については、旧稿「テーマ別分類による辞書並びに第二言語教科書—J. A. コメニウス著『開かれた言語の扉』の周辺—」(2005)において、

その中の全 100 章のタイトル名を紹介した（初版『扉』に準拠。なお、井ノ口（1998, 127-129 pp.）にも同様のものがある）。初版『扉』も第二版『扉』も全体が 100 章で構成され、どちらも 1 から 1,000 までの通し番号のついた文（主に平叙文）からなり、初版『扉』に関しては、計 8,000 の名詞語彙が一度ずつ用いられるが、第二版『扉』ではその制約はない、とされる。

『広間』は、全 100 章と通し番号付きの 1,000 の文章からなる点で全く共通であり、さらに内容についても、『広間』と第二版『扉』各章のテーマと各通し番号毎のそれとは、基本的に同一である。

表は、『広間』各章のタイトルを訳出したものである。（基本的に第二版『扉』の各章と内容的には同一であるが表現方法には違いがある。訳すに当たりそのことを尊重しつつ、鈴木（1961, 252-257 pp.）において訳出されている第二版『扉』全 100 章の和訳タイトルとも照らし合わせ、簡略にしたところがある。

同一形式で同一内容のテキストが同一著者によって書かれ提供されている理由・目的を、単純に現代の言語教育の常識に沿って理解するならば、『広間』は、上級レベルの学習者向けに「扉」の内容を、表現方法を変えたり、難しい語句に組み替えたり、より詳しい説明を付加したりして、膨らませたものではないかと推測することは、それほど困難なことではない。では、その表現レベルの異なる同一内容のテキストをパラレルに併記して掲載した教材にはどのような実際的な意味があったか、ということである。比較対照するのに便利だといってしまうまでもであるが、教師としての筆者の直感は、これは習得レベル差のある、いわゆる混成クラスに適しているのではないか、ということであった。

日本語教育に限らず、初級クラスは受講者全員が習得度ゼロで一線に並んでいることを前提とするから、全員が同一内容のテキストでよい。中級クラスは、学習者の習得レベルに差が生じてきているにしても、基本的には初級クラスで各人が学習したことの上に構成されるから、たとえ教えず

表

1 始まり	26 生命の機能	51 哲学	76 神学
2 宇宙・原素	27 動物の機能	52 数学・計算術	77 学問交流
3 天空	28 心・感情・良心	53 幾何学	78 家政・家屋
4 火	29 外部疾患	54 計量学	79 婚姻関係
5 空気・風	30 内部疾患	55 天文学	80 親子関係
6 水	31 自然の異象	56 地理学	81 主従関係
7 大地	32 耕作・栽培	57 編年史・歴史	82 家政の変化
8 鉱物	33 農耕	58 論理学	83 国家・都市
9 金属	34 畜産	59 記憶術	84 市民共同体
10 岩石・宝石	35 食料(穀物)	60 未来予測術	85 商売・取引
11 木の根・茸	36 食料(肉)	61 倫理学	86 医療従事者
12 草(の実)	37 飲料	62 英知	87 裁判・訴訟
13 灌木(の実)	38 衣服	63 勤勉	88 娯楽の形態
14 樹木(の実)	39 建築物	64 節制	89 宴会
15 動物	40 家具調度	65 勇気	90 葬儀
16 鳥	41 金属工芸	66 友愛	91 王国・属州
17 魚	42 麻・木材・皮革	67 公正	92 王国の統治
18 四足類(家畜)	43 旅行術・徒歩	68 慈悲	93 騒乱・戦争
19 四足類(野獣)	44 乗馬知識	69 敬虔	94 神と人の関係
20 人間	45 遊泳航海知識	70 その他三つの徳	95 異教徒
21 身体(外肢)	46 運送技術	71 言葉・辞書・文法	96 ユダヤ教
22 身体(骨部)	47 楽しみの種類	72 修辞・弁証術	97 キリスト教
23 身体(肉部)	48 人間形成へ	73 作詩・音楽	98 イスラム教
24 体液・精気	49 学問・書籍	74 医術	99 神の摂理
25 自然の機能	50 学校	75 法学	100 終り

ぶ内容がクラスの目的によって枝分かれしていくことはあっても、その出発点は定まっている。ところが、上級レベルのクラスとなると、これ以上のクラスは存在しないため(「超上級」という名称で設定する例があるが)、

そこには到達度の異なる様々なレベルの学生・受講生が含まれることが多い。そうしたクラスにおいて一つの教科書を選定するとなると、どのレベルに焦点をおき、如何なる文体・語彙を含むテキストを選ぶかは、教師がもっとも苦慮することである。こうした場合、大抵は共通の関心分野・テーマが優先され、これに基づいての討論や意見交換へと進み、言語・表現・文体にかかわる学習内容は従とされるか、無視されるのが一般の姿であろう。

テーマを共通にし、表現・文体に難易差のある二種のテキストを同時に提示し、教えるべきことを可能にする、このコメニウスの『扉・広間』は、こうした混成の上級クラスのジレンマに対処できる有力な教科書であったと見なすことができる。ただ、このようなことがコメニウス、あるいは『扉・広間』の刊行者の念頭にあったとは、その「序論」には触れられていないので、筆者の勝手な想像の域を出ない。いずれにしても、こういうタイプの教科書があったことをまず踏まえて先に進む。

4. 『広間』の作成理念と使用目的

ここまで、なぜこの『広間』が作成されたかを、現代の語学教師たる筆者がいわば勝手な推測を交えて考察した。だが、実は、そしてコメニウスの他のどの著述にもみられる如く、これも同様に、コメニウスの確固たる汎知思想、教授理念、作成目的、使用方法のもとに極めて精緻に、体系的に、そして完璧に作られた教科書なのであって、筆者もそれを見落としているわけではない。実際、ここまでこれを「言語教科書」として考察してきたが、コメニウス自身はこれを『事物と言語の教科書』と明記しているように、表面的に「ことば」を学ぶためではなく、ことばで表される事物の世界、世の中の全てのことをあまねく教え、学び、知るために構想された教科書である。本章では、コメニウス自身が述べていることを確認することにした。

実は「言語」教科書であるか「事物」教科書であるかは議論の重要なポイントであり、特に『扉』については、事物の教科書として論ずることが近年の一般的傾向である。鈴木秀勇（1961）は初版『扉』と第二版『扉』とを区別する中で次のように述べている。「テキスト・扉（第二版『扉』のこと。筆者注）は、『初版・扉』がその本来の意図にもかかわらず負わしめられていた言語教授方法書としての桎梏を取り外し、むしろ言語教授を自らにしたがえつつ自在に事物全体像の集約的画像描出に突き進んでいる」（鈴木（1961）246 p.）。さらには「『初版・扉』に比較して『テキスト・扉』が文字通り汎知的性格を鮮やかにおびてきて事物記述の点で詳細となり連関付けと体系化の点で密度が強められてくるのは、『初版・扉』の中に秘められてきた意図がその制約を脱し自在に発展し始めたことの証左である。」（鈴木（1961）249 p.）

だが本稿では、鈴木（1961）のような意味での初版『扉』と第二版『扉』の相違を論ずることを目的としない。また、「事物教育」や「汎知思想」が教育史的・思想史的に意味することを、理念としても実感としても十分に感得していないので、『扉』が、そして『広間』が、言語教科書か事物教科書かといった議論に加わる資格がない。しかし、言語の教育は人間の知識と実際の人生に直結するという確信と、言語教育と事物教育とは不可分であろうとの理解の下に、言語教育・言語教科書を把えることにする。

コメニウスは、『前庭』『扉』『広間』の作成理念と使用目的をその著作や教科書の序論のなかで繰り返し様々に具体的に述べている。ここでは、第二版『扉』と『広間』に並行して執筆され、『学校教育』三部作の理論的支柱ともなっている *Linguarum Methodus Novissima* [最新言語教授法] 第12章と16章から引用しつつまとめる。

『最新言語教授法』12章では、まず3種の教科書について、『前庭』は「言語の骨格 (*linguae sceleton*)」を、『扉』は「身体 (*corpus*)」を、『広間』は「生命 (*vita*) と色彩 (*color*)」を表す、と要約され、さらに『前庭』は言語を分

析的に (analysis)、『扉』は総合的に (synthesis)、『広間』は類比的に (syncretism) 表現したものである、としている。(コメニウスにおける分析、総合、類比については、私見をまとめたことがある (松岡 (2001), 松岡 (2007)) が、その時点では『広間』の存在と意義に気づいていなかった。) 以上からも分るように、『学校教育』を構成する3種の教科書はそれぞれ独自の性格づけをされ、それぞれの方法論をもつため、本来ならば三つを同時に検討すべきであるが、本稿では『広間』にのみ焦点を絞り、『前庭』と『扉』に関する部分は採り上げない。

『広間』の目的について、『最新言語教授法』は次のように箇条書きで記している。

- I 同一種類の事物 (rerum classes eadem) を借りた衣装をまとめて (mutuatio habitus)、事物の多様な名称に変えて (varia rerum transnominatio) 示す (ostendere)。
- II 言葉の変換 (vocal transformationes) を列挙する (recensere)。
- III あらゆる種類の言語の優美 (エレガンス) に関する規則を教え (de linguae omnis generis elegantibus tradere praecepta)、その言語の活力の秘密の覆いを取り除き (detegereque arcanum cuiusque linguae genium)、それによって直接に作家に近づき (eoque iam immediate in auctores veniendi)、そして支障なくそこを遊歩するための道を開く (et inoffense omnia permeandi aperire viam)。

要するに、Iは『広間』で採り上げられ、描写される事物が『扉』の中のそれと同一であり、それらが別の形で多様に表現されること、IIはそれらが一つでなく列挙して示されること、IIIは表現を優美にする文法が教えられ、それが古典作品を自在に読むために手段になることを述べている。以下のまとめとも関連するが、上の定義には、テキストだけでなく並行して作成された辞書と文法をも含まれている。

『最新言語教育法』の第16章では、この『広間』の意義がさらに詳しく

解説される。ここにおいてコメニウスは、何のために『扉』の同一の内容を言い換えて提示するのか、その理由と方法を詳述する。主に Liese (1904) のドイツ語抄訳と Jelinek (1953) の英語抄訳も参考にして要旨を一文にまとめると次のようになる。(カッコ内に該当する箇所をラテン語の全文をいれた。)

- ・心は知的理解だけでなく、魅了するものへの情動から成る。

mens nostra non intellectu tantum constat, qui docendus, sed et voluntate, quae demulcenda, hoc autem sine blanditiis quibusdam non fit.

- ・知性で理解されないことは、別の方法で優美に明らかに示される。

Cum res obscurior non satis intelligitur per se, illustratur eleganter per alliam.

- ・英知は神を手本に現われ、事物のシンボル化によって支えられる。

sapientia autem Dei illustri modo se prodat, nostra potenter se fundet in rerum symbolizationibus.

人が事物のシンボル化に向かうこと、それを美しく飾って表現することを、情動を合わせもつ人間の常としたコメニウスは、その方法として *metaphora, adagium, parabola, aenigma, phrasis* などをあげる。これらは、日本語では従来、比喩、メタファー、格言、諺、なぞなぞ、慣用句、成語、あるいは修辞法、レトリックなどといった言い回しで表現してきたものであろう。ここでキリスト教徒ではない筆者が自信をもてないのは「神を手本に」の部分である。Schaller は、『最新言語教授法』の中の同じ箇所に言及しつつ、「ハンガリーでは飾られた文体の正当化が特に必要だったのだ。神は全ての美の源として自身が優美な言語を使用する。それは単に形式的な言語技術ではなく、事物の正しい認識が全て優美なことばの基礎なのだ』(Schaller (1962) 321 p.) と述べる。筆者は、今の時点ではコメニウスの教授学を理解するのにキリスト教の神を必ずしも絶対的前提とは考えないし、また、当時のハンガリーの学校事情にも疎い。従ってここでは、Schaller の言葉をそのまま紹介するにとどめておく。

かくして『広間』において、コメニウス自身が何を意図し、そのための手段として何を使ったかが鮮明になった。実際に出来上がった『広間』の文章はどのようなものであるかは、次々章の翻訳例を示すことにし、その前に回り道ながら、事前にこの『広間』に対して後の世代が下してきた評価をみておこう。

5. 『広間』の扱われ方

前々章と前章で示したように、コメニウスは『広間』を3年の学校教育課程での第三学年のラテン語教科書として位置づけ、とくに、同一内容である第二学年用の『扉』とのその目的と表現形式の違いを明確にのべ、『前庭』『扉』と変わらぬ、あるいはそれ以上の重要性を強調した。管見の範囲でしかないが、後世のコメニウス解説書でこの3種の言語教科書を平等で紹介しているのは Laurie (1892, 188-189 pp.) で、そこには『広間』はシーザーの『ガリア戦記』よりも分量が多いといった表現もある。だが概して『広間』はそっけなく扱われている (Sadler (1966, 274 p.) など)。言語教育・学習に関わるコメニウスのその他の作品、特に『世界図絵』そして『扉』が、彼の死後も形態は様々に変容しつつも長く広く刊行され、かつ研究の対象とされてきたのに、『広間』はそうはならなかったのである。

このことを問題としてとりあげ、そして『広間』の意義を新たな角度から論じているのは Brambora (1961) である。Brambora は「コメンスキーの言語教科書のなかで、『広間』は現在もっとも知られていない作品であり、研究者からもほとんど注目されず、言及されることも分析の対象となることもなかった」と断言しているが、50年後の今もこの状況はあまり変わっていないように思われる。Brambora は論考で、『広間』の成立事情や他の教科書との関連、特に第二版『扉』との具体的な内容比較等を適切にまとめており、筆者にとって『広間』を考える手がかり・助けとなり、そして7章で述べる仮説の下敷きとなっているのだが、ここでは『広間』の文章

の特質のみに絞り、Brambora が与えている評価を取り出して一つ記す。『扉』の各章とパラレルの関係にある『広間』のどの章をとっても、互いに同一のものはない。相違点は、個々の認識対象、または人間の活動、さらには描写の形式に関しての教育内容の拡大と深化にある。(中略) コメンスキの VIA (Vestibulum [前庭]、Ianua [扉]、Atrium [広間]) の頭文字を並べると「道」の意味になる。筆者注) の三段階を観察し調査して、われわれはそこに、彼の創意で行なわれた同一内容を決して繰り返すことなく常に異なるように書き換える高度なレベルの技をもつ文学者コメンスキをみる」(Brambora (1961) 160 p.)、そして「『広間』が教師に教訓として伝えるのは、生徒に何かを教えるに際しては、その表現が理解不能なものにならないために、教える材料は、教師がかつて格闘したすべての内容から注意深く選び出されるべきで、この『広間』は、それらが無意味で味気ない消化しにくいものにならないようにするための範例となろう。」(Brambora (1961) 167 p.) という。このように Brambora は、『広間』が文学者コメニウスと言語教師コメニウスの精華であることを示唆するのである。

Brambora の言うとおりに、『広間』はコメニウス本人の思い・期待とはおそらくは裏腹に、あえて言えば現代に至るまで無視されてきた。日本の主な研究書においてもほぼ同様であろう。その理由は、挿絵がない、対訳がない、演劇化されない、などといったことが想像できる。筆者が思うのは、『広間』もコメニウスのいう「事物と言語の教科書」なのではあろうが、常識的な見方をすれば、まさに言語教育のための教科書そのものだという紛れもない事実である。その意味では、まるで百科事典の如くあらゆる分野の語彙が網羅された『扉』が、そして、『扉』の事物教材的側面だけが採り上げられ重視されるのであれば、『広間』の出番はない。加えて、すでに知られているように、コメニウスの思想、そしてその著作の意義と範囲は言語教育に限定されることがなく、また『広間』を作成する時期のコメニウス自身が、言語教科書の作成と並行して「汎知」研究と執筆が進んでい

たか、あるいは本人の気持ちはそちらの方が強かったという状況にあった。まさにそうしたなかで、おそらくは伝統的な西洋の修辞学の伝統を踏まえ、半ば文学的創作であり、と同時に語学教育上の配慮と方法論を有する、実に正攻法の上級言語教科書が成立していた、ということである。それでは一体どういう内容なのか、次章で『広間』の中から実例を示す。

6. 第二版『扉』20章と『広間』20章の内容

本章では、チューリヒ版『学校教育「扉・広間」』に基づき、第二版『扉』20章と『広間』20章の全文をラテン語原文から翻訳し、段落に付された番号ごとに上下にまとめて示す(チューリヒ版『学校教育「扉・広間」』では、左右の頁に各番号ごとに対比できるよう印刷されている)。()内のラテン語は、主格形に統一して示した。

『扉』 第20章 人間(Homo)

195. 全体的に見た人間、196. その出生において、197. 198. 199. 生涯と死、
200. 最後に、まとめ

195 われわれはここまで様々な種類の生き物(創造された事物)について考察してきた。これらを、造物主(Creator)は自らの似姿(imago)に向けて主(Domitor)をつくり、次のことが行なわれるべくゆだねた。しかしながら、もし他のことが君の認識の中に入るときは、肉体においては理性なき獣に近くとも、精神においては天使の崇高さを目指して作られた君を、肝心の君が知らないことのないように注意深く監視しなさい。

『広間』 第20章 人間とは何か、そして何のために。

195 大宇宙(Macrocosmus)から小宇宙(Microcosmus)に向かって出かけよう。そこには全事物の光線が集められている。そこにいる数多くの家族の家から家長(Pater familias)まで。それは神の似姿そのものであり、そして受肉した天使(incarnatus Angelus)である。それは小

さな世界だが、しかし偉大な神のまします宮殿、聖なる被造物 (*Animal divinum*)、事物を支配し、司る中で神を助ける人 (*coadjutor*)、目にみえるように知の遊びをつくりだす仲間 (*collusor*)、創造物の主 (*dominus*)、そしてまさしく自身その任にあたる造物主 (*Creatoris sui rationarius*)。したがって、君の認識の下に他人のそれを敷いて君自らの無知を続けることのないように、そして感覚を燃え立たせるように注意しなさい。

『扉』196

人間は母親の子宮に懐胎され、それは胎児 (*embryo*) と呼ばれる。そして、それが光のもとに出てくれば幼児 (*infans*)、未成年の間は少年 (*puer*)、成長すると若者 (*adolescens*)、背の丈が頂点に達すれば成年 (*juvenis*)、そして壮年の男 (*vir*)。やがて老齢に達すれば高齢者 (*senex*)。最後に (足腰が弱り髪も白くなった) 歯抜けのお爺さん (*senecio*) と呼ばれる。

『広間』196

人間の始まりは秘密のなかにあり、血の滴りからである。次いで、生きた塊りを生むが、それは自らを知らない。この塊りは、感覚を働かせてあちこちを鈍く動き回る小動物 (*bestiola*) になる。次に、からだの成長と同時に精神が成長するために、理性の手綱 (*rationis frenum*) で制御することが始まる。つまり、年齢とともに成人が形作られ、成熟し、智恵を備えた壮年が達成される。しかし人間は年を経て大きくなり、事物の利用に長じ始めると同時に、壮年者はやせ、衰えは始める。そしてついに朽ちた柱 (*columna*)、死の志願者 (*mortis candidatus*)、墓地の野草 (*sepulchri pabulum*)、文字通り、人間の遺物 (*hominis reliquia*) となる。

『扉』197

これが女性ならば、幼女 (*pupa*) から少女 (*puella*) へ、続いて若い娘

(adolescentula)、そして成人の娘 (juvencula)、その後には婦人 (mulier)、最後は、高齢の老婦人 (annosa vetula) となる。

『広間』197

女性 (sequioris sexus) の状況も異なっていない。年齢が上がるにつれて名称が入れ替わる。名称とともに気分が、気分とともに意欲と行動が取り替えられ、それによって人々は衰弱し、命そのものがすり減る。

『扉』198

このように、人生の行路 (curriculum) は、生まれ、大きくなり、成人を迎え、壮年期を通過して、老い、衰え、そして死ぬ以外の何物でもない。

『広間』198

まこと、このように、人間の一生は自らの幾つかの歩み (gradus) で区切られた階段 (scala) であり、それを経て生命力 (vigor) の絶頂 (acme) を上りつめ、そこから再び出口 (exitum) に下っていく。実際、全生涯の巡り行き (ambitus) は一日の、あるいは一年の回転 (revolutio) に喩えることができよう。なぜならば、春が季節の明け方 (diluculum) であるならば、幼年期 (infantia) は人生の明け方でなくて何であろうか。青春期 (juventus) は、夏が季節のそれであるように、人生の上昇期 (exortus) でなくて何であろうか。壮年期 (virilitas) もまた、秋が季節のそれであるように、人生の昼間 (meridies) でなくて何であろうか。老齢期 (senectus) は、冬が季節のそれであるように、人生の暮れ方 (vespera) ・日没 (occasus) でなくて何であろうか。

『扉』199

それぞれの年齢期の用務 (occupationes) に君が注意を払うならば、幼年期は自分自らに無知であり、少年期は遊ぶこと (ludicrus) で費やされ、若者時代は好奇心 (curiosus) をそそるものに魅惑され、成年期

は虚栄 (vanis) にちやほやされ、壮年期は仕事 (labor) で疲れはて、高齢期はかつての虚弱 (invalescencia) に逆戻りする (したがって老人は再び少年となるため、二度目の少年といわれる)。そうして、老齡の弛緩 (marcor) が人生を使いいきり、ああ、何ともはかない一生を完結するまで！

『広間』199

人生の各時期をもし君が観察するならば、幼年期 (ignorantia)、少年期は遊び (ludus)、青春期は好奇心 (curiositas)、成年期は虚栄 (vanitas)、壮年期は仕事と疲労 (fatigatio)、老年期は待ち望んだ不幸、つまり不治の病、死の玄関 (vestibulum)、全ドラマの終幕 (fabulae totius clausula) である。全人生を君が眺めるならば、それは一呼吸 (respiratio) のために許された時間 (mora) にすぎない。それは不確かな巡礼の旅 (peregrinatio) であり、確かなことは待ち受ける死であり、風の中に置かれたランプ (lukerna) である。幸福の喜びは短く、不幸の苦しみは悲しい。要するに人生は、誉め称える追従頌歌 (panegyricus) で結わえられた仕事の束 (conkatenatio) で、そこではよきことは速く流れ去り、悪しきことがそれに続く。人は全ての人間にとって共通の場所 (communis locus) に向かって行くのが定めなのだから、それが長くは生きのびないことだけが慰めだ。

『扉』200

だが、この間にここでは、われわれの導き送られる永遠に向けてすべて準備が整う (preparamur) ため、遂行されるべき多くのことがわれわれにゆだねられる。だから、君が君自らを知ることを学びたまえ。私はそれを切望する。

『広間』200

こうしている間に、人がここで生きている瞬間に、ああ、何ということだ、われわれが果たすべきことはどれほど多く着手されているだ

ろうか！ 勿論、現世の行路 (curriculum) での思慮深いやりくり (regimen) だけではなく、やがて開始される永遠に向けてのふさわしい準備 (apparatio condigna) がそれだが、それが何と少ないことか。おお、賢明にして、永遠の志願者 (candidatus) にふさわしく (addecet) あるべく振舞う者はだれか。

以上が第二版『扉』と『広間』それぞれ第 20 章の内容である。参考ながら、初版『扉』の第 20 章もタイトルは「人間」であり、その日本語訳は、松岡 (2005) に載っている。なお、本稿では本文と関連する文法と辞書に触れることができなかったが、ODO とは別に刊行された『広間』の辞書 LEXICON ATRIALE LATINO-LATINUM [ラテン語・ラテン語「広間」レキシコン] の実物はチェコ国内で見ることができ、その中の「人間」の項には「Caput, Persona, Anima, Microcosmus, Mortalis, Animal divinum, Ambulatilis planta, Coadjutor Dei, Collusor Dei, Dei ludibrium, Dominus creaturarum, Imago Dei」が列挙されているのを確認した。これらは『広間』番号 195 とも関連する語彙・表現である。ほんの一例ながら、『広間レキシコン』が言い換え表現や類義語の辞典、英語で言えば Thesaurus の項目が abc 順に並んだもの、さらには出典が示されているので引用句辞典的なものであろうか。

7. 『広間』の意義再考—日本語教育から考える

『最新言語教授法』12 章、16 章でのコメニウス自身による定義と位置づけ、プラムボラの評価、そして第二版『扉』と『広間』の本文の対比実例が示すように、『広間』の文章は、語句・文章・表現の言い換えや比喩・レトリックによって優美に飾られたものである。これを一つの文章技術と捉えるならば、おそらくはコメニウスもギリシャ語に始まり、そしてラテン語へ引き継がれていく西欧の修辞法の伝統の上に位置づけられるのであろう。これをきちんと考察するには、コメニウスの残した『広間』のための

文法の解説が必要となるが、今後の課題として残される。また、『広間』の本文がラテン語として本当に「優美（エレガンス）」で優れた文章なのかどうかについても、筆者の語学力のレベルでは意見を述べる資格はない。

そうした留保条件があることを前提にして、コメニウスがくどいほど意を尽くして述べ、試みた「言い替え」や「装飾」は、一体、現代の言語教育においてどのような意味があるかを考えてみよう。成人外国人相手の日本語教育を例にとれば、その大本は、現実の状況にそって事実を正確に認識・把握し、それを文法上も正確に、論理的に、かつ簡潔に伝える言語技術を迅速に養成することであろう。その際には、テキストに加えて文法と辞書とが三位一体の教材となる。ここまでは、コメニウスの教授観と教科書は、内容は別として現代における言語教育と衝突するものはない。

しかしながら、事実描写から比喩表現にきりかえて、つまり「ことばを飾る」や「言い換えて優美にする」ことで、表現内容がより明確になるという発想、あるいは少し譲って、どちらもが対等に重要であるという考えは、従来の日本語教育、少なくともこれまでの筆者の考えの中では重要ではなかったような気がする。だが、筆者自身が上級段階のクラスを担当することが多くなったこともあって、あらためてコメニウスの第3学年教科書『広間』の意義を気づかされることになった。授業での試みの一つ披露するならば、今学期（2012年度）本学での学部1年生を対象とする日本語授業で、筆者は福澤諭吉の著作から口語文で書かれた自伝、文語文で書かれた論説文、そして候文で書かれた手紙文を、導入時期をずらして、時に並行してクラス内で読んでみた。それぞれ文体は異なるものの全体の内容としては似通うテーマが多く、また、学生の日本語力はいわゆる上級段階といっても、かなりの差が見られるクラスである。いわば1年間の混成クラスで、「扉・広間」併記版教科書から得たアイデアを試みたわけである。その成果と学生の反応についてはここでは特に報告しないが、レベルの高い学生と低い学生の双方がそれぞれの興味と緊張感を持って授業に臨

んでいたという印象だけは記しておこう。これは、コメニウス再発見を感じさせてくれた得難い体験であった。

また、筆者はかつて、学部一年生対象の日本語授業で年間を通して課題を与えて小作文を書かせ続け、そのうち、スタイルの異なる二人の学生の作文を対比して検討したことがある（松岡（1994））。二人は期せずして、3年後の学位授与式において一人は全学を代表して答辞を述べ、もう一人は学部を代表し証書をうけるという優秀な学生であったが、彼らの作文は、一方は、理知的でそつなく型に従ってまとめるタイプ、もう一方は、たとえばその作文の冒頭が『教室に鬼がいた』といった比喩表現で始まるような、感性を重んじ意図的に型を破るタイプであった。筆者はどちらかに軍杯をあげたわけではないが、「型を重んじた」指導方針とは逆に、「型を破った」方に分があると感じたことを今も思い出す。本稿の『扉』と『広間』の意義の確認は、18年前のこの授業体験とどこかでつながっているのかもしれない。

3章で述べたように、そもそも上級用の言語教育教材は、学習者の日本語到達度や関心に差があるという現実認識に立って、教材はテーマ・話題が主たる選択基準となり、それにそって読解なり作文なり、議論・対話なりの教育が行なわれる。そして、上級レベルの言語教育の現実には、教材中に出現する特異な文体、慣用句、比喩表現などがその都度取り出され、より平易な、簡潔な、あるいは論理的にわかりやすい表現へと言い換えて説明されるというのが大半であろう。

そうであれば、『扉』と『広間』は、その作業をきわめて意識的に、つまり言語教育上の周到な配慮にもとづいて、同一テーマの上に同時に行い、それを学習者に示し、理解させ、習得させようという構想に立った教材そのものである。また、『広間』の内容は一面、古めかしい修辞・レトリックが前面に出てくることで時代に逆行しているかの印象を与えるかもしれないが、実は近年の認知意味論、メタファー論、比喩研究等の盛況を見れ

ば、これは現代を先取りしたものといつてよい。

そこで筆者の仮説は、すでに明らかなように、現代の言語教育においても、あるいは現代に於いてこそまさに、『広間』に込められ、実行されたコメニウスの言語教育の理想と実践は完成するであろう、ということである。なぜならば、『扉』の「事実」と、『広間』の「装飾」は、楯の両面にして不即不離の関係にあり、両方が備わってこそその言語教育なのだから。

こう考えるならば『扉』と『広間』は、同時に教えられてもかまわない。その意味で、「扉・広間」併記版が存在するのは理にかなっていたし、「飾らない」表現と「飾られた」表現のどちらにも真実が存在することを、コメニウスは文学作品ではなく、言語教育教材において試み、貫徹した、ということである。これは現代の言語教師でも思いつきそうな技・発想であるが、それを『扉』のテキスト全編にわたって実行・実現したところが巨人と小人の違いであろうか。

8. おわりに

以上の仮説をなお検証するには、第二版『扉』と『広間』の全章を読み解く作業が伴わなくてはならず、また、その実践的価値を主張するならば、現代の教材において同様のものが作れるかどうかを示さなければならないが、残念ながら本稿では読解作業の一部を提示するに終った。

最後に、なぜこの『広間』がこれまで注目されず、言及されずにきてしまったかであるが、これは一般的に学界の関心がコメニウスの汎知思想の方に集中しているため、彼のラテン語教師・教育者という資質と実績が重要視されてこなかったことにもよるのであろう。その意味では本稿が「大海に一滴」以上のものであることを念じつつ、稿を閉じることにしよう。

参考文献

[コメニウス著作・著作集]

Academia Scientiarum Bohemoslovenica (ed.). Joannes Amos Comenius. OPERA DIDACTICA OMNIA (ODO). 1957, Praga. (original edition: 1657, Amsterdam.).

Jan Kvačala (ed.), Veškerè Spisy Jana Amosa Komenského (VSJAK) IV, VI. 1911, 1913, Brno.

Československá akademie věd (ed.), DILO JANA AMOSE KOMENSKEHO, JOHANNIS AMOS COENII OPERA OMNIA (JACOO) 15/I~III. 1992, Praha.

Curavit Jaromír Červenka (ed.), JOHANNIS A. COMENII JANUA LINGUARUM RESERATA. 1959, Praha.

JOH. AMOS COMENII ERUDITIONIS SCHOLASTICAE JANUA, Itémque ATRIUM (parallelè positum). 1661, Tiguri (Zürich). In collection of Muzeum J. A. Komenského v Uherském Brodě and Muzeum J. A. Komenského v Přerově.

JOANNES A. COMENIUS. LATINAE LINGVAE JANUA RESERATA. (ad leges Methodi linguarum novissimae), THE GATE OF THE LATINE TONGUE UNLOCKED. (according to the Rules of the newest Method of Tongues). 1656, London. In collection of Muzeum J. A. Komenského v Přerově.

J. A. COMENII LEXICON ATRIALE LATINO-LATINUM, Simplices & native rerum nomenclationes, è Ianua linguae Latinae jam notas in elegantes variè commutare docens. 1657, Amsterdam. In collection of Muzeum J.A.Komenského v Přerově.

LINGUARUM METHODUS NOVISSIMA, 1649, Leszo. (in ODO, VSJAK, JACOO) Abridged German translation: Die neueste Sprachmethode von Ernst Liese, 1904, Leipzig. Abridged English translation: The analytical Didactic of Comenius von Vladimír Jelinek, 1953, Chicago.

Eruditionis scholasticae, Pars I, VESTIBULUM, Rerum & Linguae fundamenta ponens. (in ODO).

Eruditionis scholasticae, Pars II, JANUA, Rerum & LL. structuram exhibens. (in ODO, in Červenka (ed.), in "JANUA Itemque ATRIUM", in "LATINAE LINGVAE JANUA RESERATA").

Eruditionis scholasticae, Pars III, ATRIUM, Rerum & LL. ornamenta exhibens. (in ODO, in "JANUA Itemque ATRIUM").

SCHOLAE PANSOPHICAE Pars II, Septem ejus Classium descriptionem continens Specialem. (in ODO). German translation: Die pansophische Schule, Spezielle Beschreibung der sieben Klassen dieser Schule. in "Comenius. Ausgewählte Schriften" von J. Beeger u. J. Leutbecher, 1874, Leipzig.

[引用参考文献]

- Blekastad, Milada: COMENIUS Versuch eines Umrisses von Leben, Werk und Schicksal des JAN AMOS KOMMENSKÝ, 1969, Oslo.
- Brambora, Josef: der Saal—Das Meisterwerk von Komenskýs Spracherbüchern, in Acta Comeniana: Archiv pro Bádání o Životě a Díle Jana Amose Komenského 22, 1961, Praha.
- Čapková, Dagmar: OPERA DIDACTICA OMINA J. A. KOKENSKÈHO. 2007, Praha & Přerov.
- Kvačala, Johannes: Die pädagogische Reform des Comenius in Deutschland bis zum Ausgange des XVII. Jahrhunderts, 2. Band. 1904, Berlin.
- Laurie, S. S.: JOHN AMOS COMENIUS—His Life and Educational Works, 1892, New York.
- Sadler, J. E.: J. A. Comenius and the Concept of Universal Education, 1966, London.
- Schaller, Klaus: Die Pädagogik des Johann Amos Comenius. 1962, Heidelberg.
- Schaller, Klaus: Johann Amos Comenius: Ein pädagogisches Porträt, 2004, Berlin.
- 井ノ口淳三訳 (1995) コメニウス著『世界図絵』平凡社.
- 井ノ口淳三 (1998) 『コメニウス教育学の研究』ミネルヴァ書房.
- 大橋祐子 (2004) 「コメニウスの滞在時のシャーロシュバタク」『日本のコメニウス第14号』日本コメニウス研究会.
- 貴島正秋 (2006) 「コメニウスの『汎知学校の輪郭』における理想的な学校構想」(4) 『初期コメニウス思想の総合的研究—迷宮からの脱出—』平成15年度～平成17年度科学研究費補助金研究成果報告書.
- 鈴木秀勇 (1961) 「コメニウス教授学の方法—その社会史的規定のために—」『一橋大学研究年報・社会学研究3』一橋大学.
- 藤田輝夫訳 (1985) 「コメニウス著『教授論究』(1638)」私家版.
- 藤田輝夫訳 (1991) 「コメニウス著『開かれた言語の扉』[初版『扉』(1633)]」私家版.
- 松岡 弘 (1994) 「日本語教育における「論理的文章の組み立て方」の指導」『一橋論叢』第111巻第3号一橋学会.
- 松岡 弘 (2001) 「コメニウス教授学における「分析」と「総合」の意味について」『日本語学と言語学』明治書院.
- 松岡 弘 (2005) 「テーマ別分類による辞書並びに第二言語教科書—J. A. コメニウス著『開かれた言語の扉』の周辺」『一橋論叢』第133巻第3号一橋学会.
- 松岡 弘 (2007) 「『鏡』の中の言語教育—日本語教師の捉えたコメニウスの Methodus Syncritica (類比の方法)—」『日本語と日本語教育』第35号, 慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター.